

## 自閉スペクトラム症とアタッチメントについて

「信頼関係が大切！」 「アタッチメントを形成することが小学部段階では大切！」 というフレーズは特別支援学校の特に先生をしているとしばしば耳にするフレーズですよね。でも、このアタッチメントに関してのフレーズは、アタッチメント理論を知った上で使わないと「発達の緩やかな子どもへのベタづき支援」や「僕じゃなきゃダメなんです」といった特定の先生による子供の囲い込みといった弊害につながってしまいます。本号では「アタッチメント」や「信頼関係形成」とは何なのか？ 「アタッチメント」や「信頼関係形成」のポイントは何なのかということを、特に感覚面や社会性に課題を抱えやすい自閉スペクトラム症のある子ども（以下 ASD児とする）を柱にして考えていきます。

### 「アタッチメント」とは何なのか？

「アタッチメント」とは平たく言えば、

『子どもが何か不安な状況やストレス・フルな状況に晒された時に、特定の他者（親とか先生とか）に『たーすけてー』とくっついて、安全を得たり、不安を回避したりするための安全基地のように扱いながら自分の感情を立てすこと』と言ることができます。他に例えるならば、珊瑚と小魚の関係、蜂の巣と働き蜂の関係のような感じでしょうか。

### 「アタッチメント形成に課題がある場合」とは何なのか？

アタッチメント形成に特別の課題がなければ、血眼になっていつまでもアタッチメント形成に重きをおくのではなくて、基礎学力の形成やコミュニケーション手段の獲得に力点を移したほうが良いと思うのですが、「アタッチメントの形成が上手くいかなくて問題となる場合」は、例えば「虐待」や「ネグレクト」、「気分的な不安定対応」などが原因で、特定の大人を安全基地とした安全確保や危険回避などが乳幼児期にうまくできなかった場合のことを指します。そして、アタッチメント形成が不全だった場合の影響は一時的ではなく、成人に至るまで続していくこともあるのだとされています。逆に順調にアタッチメント形成が進む際には、年齢を重ねるにつれて、心理的なつながりを糧にしながら次第に安全基地となる人から距離ができていく段階に移行していくとされています。

### ASD児のアタッチメント形成についての疑問

ここで一つ疑問に思うのは「ASDのある子どものアタッチメントについて」で、社会性に関する障害特性による苦手さや触覚過敏による「接触」の苦手さがある ASD児はもしかすると乳幼児期のアタッチメント形成に失敗やすいのでは？ということです。

例えば、いつもお母さんの近くに ASD児がいることで、一見アタッチメントが形成されているように見えても、母親の機能的な側面だけが本人には見えていて

お母さんは「ジュースをくれる人」

お母さんは「車に乗せてくれる人」

お母さんは「届かないものを取ってくれる人」

であって、安全確保や、危険回避のための安全基地として機能していない可能性があります。

## 参考：自閉スペクトラム症（ASD）児におけるアタッチメント研究の概観

[https://repository.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/?action=repository\\_action\\_common\\_download&item\\_id=52042&item\\_no=1&attribute\\_id=19&file\\_no=1&fbclid=IwAR2z\\_WLz1MRnAQ\\_JMImYCBg-9xjLQyusv5B15YHPXnIK-0ySq0rwDBAPsZM](https://repository.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/?action=repository_action_common_download&item_id=52042&item_no=1&attribute_id=19&file_no=1&fbclid=IwAR2z_WLz1MRnAQ_JMImYCBg-9xjLQyusv5B15YHPXnIK-0ySq0rwDBAPsZM)

まだあまり深掘りしていないので、言い切れるような状態ではないのですが、この論文の内容による  
と、自閉スペクトラム症のある人も多少の形成比率の減少が見られるもののアタッチメントは形成される  
のだと（むしろ ASD がある事が係数(a)だとすると、知的発達の遅れの度合いが変数的に考えられて  
(x)、知的発達の遅れが大きいほど、アタッチメント形成の度合い(y)が低まる(かもしれない)とされてい  
ました。 $y=ax$ ）。但し、やはり特異性もあるとされていて定型発達児と同じ実験や尺度では結論を出し切  
れないともされました。

特別支援学校では「安全基地」ではなくて、先生が「ベタづきシェルター化」していることも

また、特別支援学校においては小魚とサンゴの関係のような、働き蜂と蜂の巣のような「外界に再び向  
かうための安全基地」ではなく、囲い込みをした「シェルター」に近い形のベタづき支援なっていること  
も散見されるのでこの点については注意が必要です。特に特別支援学校・学級では、多くの先生と多くの  
場面でポジティブな情動の随伴性をもつことが大切ですよね。

### まとめ

つらつらと追ってきたのですが、ASD 児のアタッチメント形成ってつまるところ

- ① まずは「本当につまづいているのか？」というそもそも論がスタート（スペクトラムなので、アタッ  
チメント形成がうまく言っている子もいるはず）
- ② 一人の先生が常に核シェルター的に機能するのは NG(ベタ付き禁止!!)で、できるだけ多くの先生が、  
いろいろな場面で、子どもが学習に向かう際の安全基地となるということが ASD 児のアタッチメント形  
成については良いだろう
- ③ 乳幼児期に「安全基地」作りに失敗したという課題と学校の先生が勝手にベタ付き核シェルターに囲い  
込んで自己満足している対応はつながらない

ということを意識できると良いのかな？と思われます。